

2010

地歴最新資料

第12号 (2010年4月15日現在)

INDEX

2009年5月～2010年4月のおもなできごと・TOPIC! 2

世界史

特集

「境界線」の克服の試み

～あるローマ“辺境”の再認識を例として・・ 3

早稲田高等学校教諭 菊地 英

①日本メキシコ交流400年 ～交流のエピソード～ 5

日本史

②歴史共同研究の取り組み 6

③近代建築の評価 6

④纏向遺跡(奈良県桜井市)の発掘 7

⑤アジア歴史資料センターの取り組み 8

地理

授業実践例

読み聞かせを取り入れた地理の授業展開・ 9

共立女子中学・高等学校教諭 池末 和幸

⑥クロマグロ規制と持続可能な利用 11



第一学習社

2009 年 5 月～2010 年 4 月のおもなできごと

(注) ○内の数字は月を示す。下線部③、④、⑥は解説の掲載を示す。

政 治	社会・文化	国際情勢
2009 年 ⑤21 日、裁判員制度開始。 ⑦8 日、水俣病被害者救済法成立。 ⑦13 日、改正臓器移植法成立。 ⑦21 日、衆議院解散。 ⑧3 日、全国初の裁判員裁判開始。 ⑧30 日、衆議院総選挙。民主党が過半数を超える 308 議席を獲得し、政権交代。 ⑨1 日、消費者庁発足。 ⑨16 日、麻生内閣総辞職。民主・社民・国民新 3 党連立による鳩山内閣が発足。 ⑨28 日、自民党総裁に谷垣禎一就任。 ⑪11 日、国の歳出を削減するための「事業仕分け」開始。 ⑫1 日、原爆症救済法成立。 ⑫5 日、アメリカ軍普天間飛行場移設問題について、政府は 2010 年 5 月までに移設先を選定する方針を決定。 2010 年 ①19 日、日本航空が東京地裁に会社更生法の適用を申請。即日決定。 ③26 日、子ども手当法成立。 ③31 日、高校無償化法成立。 ④10 日、無所属の平沼赳夫や自民党離党議員が新党「たちあがれ日本」を結成。	2009 年 ⑤9 日、国内初の新型インフルエンザ感染者を確認。 ⑥25 日、アメリカの歌手マイケル=ジャクソン急死。 ⑥30 日、③「高島屋東京店」重要文化財に指定。 ⑦19 日、国際宇宙ステーションの日本実験棟「きぼう」完成。 ⑦22 日、国内で 46 年ぶりの皆既日食を観測。 ⑩2 日、2016 年夏季五輪開催地がリオデジャネイロに決定。東京は落選。 ⑪10 日、④奈良県の桜井市教育委員会が、 <u>纏向遺跡で 3 世紀前半の国内最大級の大型建物跡がみつかったと発表</u> 。 ⑪30 日、③「赤坂離宮」国宝に指定。 ⑫27 日、中国河南省文物局が、中国安陽市で魏の事実上の創建者、曹操の陵墓を発見したと発表。 2010 年 ①7 日、奈良県立橿原考古学研究所が、奈良県桜井市の桜井茶臼山古墳から、国内最多となる 81 枚の銅鏡がみつかったと発表。 ②12 日、バンクーバー冬季五輪開幕。史上最多の 82 か国・地域が参加。28 日に閉幕。 ②17 日、エジプト考古最高評議会が、ツタンカーメンの死因は足の骨の異常とマラリアなどの複合要因だったと発表。 ②28 日、チリ大地震の影響で、三陸沿岸に大津波警報、他の太平洋沿岸部などに津波警報発令。	2009 年 ⑤19 日、スリランカのラージャパクサ大統領が内戦の終結を宣言。 ⑤25 日、北朝鮮が 2006 年以来 2 度目の地下核実験を実施。 ⑥11 日、WHO が新型インフルエンザの警戒水準を世界的大流行(パンデミック)を意味するフェーズ 6 に引き上げ。 ⑦5 日、中国新疆ウイグル自治区で、ウイグル人住民による暴動が発生。 ⑨24 日、国連安全保障理事会で核不拡散と核軍縮に関する首脳級会合開催。「核兵器なき世界」をめざす決議を採択。 ⑩10 日、トルコとアルメニアの国交樹立。 ⑪19 日、ファンロンパイ・ベルギー前首相が初代 EU 大統領に就任。 ⑫1 日、EU でリスボン条約発効。 2010 年 ①12 日、ハイチでマグニチュード 7.0 の大地震発生。 ②23 日、スーダン政府と反政府武装組織がダルフール紛争の暫定休戦に合意。 ②27 日、チリでマグニチュード 8.8 の大地震発生。 ③18 日、⑥カタール・ドーハで開催されたワシントン条約第 15 回締約国会議で、 <u>大西洋・地中海産クロマグロの国際取引を禁止する提案が否決</u> 。

TOPIC!

●未知の人類、約 4 万年前にロシアで生存 世界史

2010 年 3 月、ドイツなどの国際研究チームは、約 4 万年前にロシア南部で未知の人類が生存していた可能性が高いことを発表した。研究チームは、ロシアのデニソワ洞穴の 4 万 8000～3 万年前の地層から、2008 年に発掘された人類の指の骨片を分析。DNA の解読結果から、骨片をネアンデルタール人と現生人類が分かれた約 47 万年前よりも古い、約 104 万年前に共通の祖先から分かれた人類のものと結論づけた(発見された地名より「デニソワ人」と命名)。この結果、デニソワ人は、ネアンデルタール人や現生人類と同時代に共存していたことになるが、その姿かたちまでは判明していない。

●平城遷都 1300 年 日本史

2010 年は、奈良の平城京に都が移されてから 1300 年目の節目の年にあたる。平城京は 710 年に藤原京から遷都され、784 年に長岡京に遷都されるまでの 74 年間、都として存在した。2010 年にはこれを記念してさまざまなイベントがおこなわれる。メイン会場となるのは世界遺産でもある平城宮跡で、2010 年 4 月にはその中心であった大極殿正殿(第 1 次)が復元された。メイン会場でのイベントの開催期間は 2010 年 4 月 24 日～11 月 7 日までとなっている。

●中南米での 2 つの大地震 地理

2010 年 1 月 12 日、ハイチでマグニチュード 7.0 の大地震が発生した。犠牲者数は 20 万人を超えたとわれ、ハイチ国内では道路が寸断されて救援物資が被災者に届かず、政府機能も麻痺して復興が進まないという状況が何日も続いた。また、2 月 27 日にはチリでマグニチュード 8.8 の大地震が発生した。この地震による津波は最大で 28m にもおよび、日本国内でも 28 日に三陸沿岸地域に 16 年ぶりの大津波警報が発令された。これらの地震発生後には「Google マップ」や「ツイッター」などのネット上のサービスによっていち早く地震情報や被災状況が提供され、救援活動にも役立った。

●問題意識

たしかに教科書、資料集は膨大な情報を有しているが、当然ながら、国家や民族といった枠組みでもって人間集団を把握することが、「効率」よく通史を理解する上では適しているのだから、どうしても政治史的な内容が中心的に描かれる。また、多くの資料集は政治史と文化史をそれぞれ別のページで、多様な観点からそれぞれの時代を描くことを試みており、授業者がこれらを用いて説明を行うことで学習者は通史を理解しようとする。然るに、教科書や既存の資料集の説明あるいは図表は、必要最低限の知識を与える材料として十分であるにせよ、学習者に主体的な取り組みを促し、平和協調の基底を成す人類史の認識を育むのに果たして十分と言えるだろうか。また、改訂された学習指導要領に示されるように(地歴最新資料第11号・特集「世界史A」「世界史B」学習指導要領改訂を読む～中・高の連続性の視点から～を参照)、学習者が「適切な主題を設定し考察し」、「歴史的観点から資料を活用して探究」するためには、授業者は何を提示し、如何なる問題意識を育むことを意図するべきであろうか。

たとえば、カナダ・南アフリカ・オーストラリア…等々の大英帝国の各植民地における支配は、それらが地図上で同色に塗られていることが示すように均質化されたものであったのだろうか。しばしば三角形の表で示される「モンゴル帝国」の四層(モンゴル人・色目人・漢人・南人)の身分は、果たして明確な階層構造として捉えることが出来るものだったのだろうか。ホルテンシウスによる法制定はパトリキ・プレブス間の身分闘争の終結を意味する、で終わって良いはずがない…。要するに、階層、制度、地理的領域の問題その他における何らかの「境界線」上の、あるいはそれによって区切られた人々のすがた、人間間の交流の実態については、残念ながら教科書や資料集においては描かれにくく、それゆえ記述される内容から読み解くのは難しいのである。結果として、場合によっては全体の解釈において重大な誤解を生んでしまう可能性があると思われる。

即ち、諸処の世界史における同様の疑問に答えるには教科書、資料集、あるいは一般的に用いられている所謂「用語集」では不足であり、授業者は何らかの別の素材を用いなければならない。そこで、全ての範囲において同一に行うことは時間の制約上不可能だとしても、学習者に対して通史を学ばせる中で逐一疑問を抱かせ、自ら歴史的事項について考察し、歴史解釈に参加させる根拠となる「史料」を授業者が提示する機会が有効である。

あるいは高等学校世界史では基本的な通史の知識を身に付け、専門的な内容や歴史学的考察は大学に任せればよい、

という発想もあるかもしれない。史料批判をはじめ史料の扱いには極めて慎重を期さねばならないのだから高校生には時期早尚である、という批判もあるであろう。また、外国語文献や碑文等の史料を用いるとしても、それぞれ授業者の専門領域は異なり、出版されている邦訳史料には限りがあるのだから、用いることの出来る史料もおのずから限定されるかもしれない。

だが一方で、大学では人類史を学ぶ学生が、そうでない学生より少ないのが嘆かわしくも現状である。もはや定着したであろう「世界史の必修」によって、学習者は高等学校におけるそれをもって世界史＝人類史を学んだ、ということになってしまう。しかし、大多数の人間にとって史料に触れて歴史を考察する機会は極めて少ないのである。学習者が史料に触れて考察することは、偏見や人々の交流についての誤った理解に陥らないためだけでなく、歴史が単なる物語ではなく史料に基づいて科学的に考察され、現在を生きる我々が常に向き合わねばならない人類の過去である、ということを確認していく契機にもなるだろう。

●史料を用いた「境界線」の再認識、ローマとゲルマンの関係を例として

一般的に世界史の教科書においては、西洋古代史の最後の数ページは、ローマによる地中海世界の支配を中心に記述される。すなわち都市国家ローマは、階層間の対立を経ながらもイタリアの統一をすすめ、所謂ポエニ戦争をはじめとする諸々の戦争を行って海外に属州を獲得して拡大を遂げ、紀元2世紀には「最大版図」を形成したが、その後は軍隊に担がれた皇帝が続いて混乱した。このあたりから北方よりゲルマン人の侵入に苦しんだローマは、ゲルマン民族大移動の中で、東西分裂後の西暦476年に「滅亡」する、という流れで描かれる。記述されている内容から学習者は、ローマの混乱・衰退においてゲルマンはその中心的な役割を果たし、(たとえその「一部」が傭兵やコロヌスとして「帝国内」に居住している、という説明があったとしても)ローマとゲルマンが二項対立的な構図を形成していることを容易に推定してしまうだろう。因みにほとんどの場合、教科書において「ゲルマン人」オドアケルによる「滅亡」以降で再びゲルマンが描かれるのは、他地域の古代史を経た随分後のページにおける西洋中世史の冒頭部分であり、ローマ辺境における人間交流を考えるには遅すぎる気がする。というのは、古代史におけるローマ辺境の人間交流の描写は、ローマによる支配の実態についてより良く理解する上でも必要不可欠なことと思われるからである。

また、現在刊行されている全ての教科書・資料集には「ローマの版図」が示されており、学習者はローマの「国境

線」が次第に外側へ遠のいていくのを視覚的に理解し、如何にローマが広大な範囲を支配・影響下においていたのか、ということを読み解くことが出来るようになっている。だが、ここですと例えばローマの北方辺境に注目すると、(所謂「トラヤヌス帝による最大版図」などの地図によれば)ライン・ドナウ両川に沿ってローマ・ゲルマン間の国境線のごとき「境界線」が示されている。無論、我々授業者はそこに明確な国境線が引かれ、ローマとゲルマンを完全に引き離していたなどとは考えないが、学習者にとっては先述した二項対立的なイメージとともに、確固たる「境界線」として認識されてしまうのは自然なことではなかろうか。

このような問題に対し、より学習者を主体的に授業や歴史解釈に参加させる目論見も含めて、史料の読解によるローマ・ゲルマン関係の再認識を試みたい。1～2世紀の歴史家タキトゥスの残した史料の一つ『ゲルマーニア』の邦訳史料より、紙面の関係上僅かだが以下の例を挙げる(ここでは泉井久之助訳注『ゲルマーニア』岩波文庫版から引用する。※印は本稿筆者による補足である)。

【例1】『ゲルマーニア』第29章

(レーヌス※ライン)河の右岸に住む)マッティアキーの部族もまた、(ローマに対して)服属関係にある。まことにローマ国民の偉大なる、ついにそれは、レーヌス河を打ち渡り、帝権伸張のかつての限界をさえうち越えて、この部族にまで、帝国の威信を及ぼしたのである。したがってその住地、その邦土の点において、マッティアキーはみずからの岸(※ライン右岸)に住んではいる。しかし心情、意気において、彼らはわれわれと共に暮らしているのである。

【例2】『ゲルマーニア』第41章

ダーヌウィウス(※ドナウ)河に従って(西より東へ)筆を進めるならば、(イタリア側から見て他よりも近く、まず)ローマ人に忠実なヘルムンドゥーリーの国が横たわる。その忠実のゆえをもって、ゲルマーニア諸族のうち、ひとり彼らのみが、(ダーヌウィウスの)河岸においてのみならず、また(南岸のローマ領に)深く立ち入ってラエティア州の最も壮麗な植民市(コロニア)においてさえ、(ローマ人との)商取引を許されているのである。何処においても、しかも監視を受けることなく、彼らは自由にかの河を渡り歩く(ローマ領に自由に出入りする)。

【例3】『ゲルマーニア』第42章

ヘルムンドゥーリーについて(その東南にむかって)ナリストイー、なお次にマルコマンニーおよびクァディーがそれぞれ生を営む。(略)マルコマンニーとクァディーには、われわれの知る以前までは、彼らみずからの種族から出身の王たちが存続していた。(略)今、彼らは他部族出身の王たちの下にさえ甘んじているとはいえ、そ

の王たちの権力、勢力の由って来たところは、やはりローマの威望である。稀にわれわれの武力をもって、よりしばしば金力をもって援助される。しかしこのため、彼らがそれだけ威望を失うことはない。

いずれの史料も地図等を併用して考察し、ライン・ドナウ両川周辺におけるローマとゲルマンの関わりを読み解くために有効である。例えば【例1】からは、比較的ローマに対して従属的な部族が「境界線」たるライン川のすぐ外側に居住しており敵対関係にはないこと、【例2】からはドナウ川中流域におけるローマ・ゲルマン間の商業活動を中心とする人々の交流の実態、【例3】からは【例2】で示されたよりもやや下流域における王制を布く諸部族と、それらに対するローマの関わりを読み取ることが出来る。また【例3】に関して専門的な考察を加えれば、ローマはゲルマン諸部族の王たちと恒常的な関係を有することで、ゲルマンの諸部族を間接的に支配、ないしはそれらの対立を利用して辺境の「平和」を保っていたと考えられるかもしれない。いずれにせよ、これら史料の読解を通して学習者はローマ辺境地域における人々の交流を考え、そこに明確な「境界線」など無かったことを推察し、偏った二項対立的なイメージを払拭することが出来るのではないだろうか(より詳細な考察、学習者への提示等については、拙稿「高校世界史におけるローマ・ゲルマン関係史の位置について」『史海』第55号を参照されたい)。更に、学習者は辺境における人間間交流の再認識を通じて、「ローマー国による地中海世界の支配」や「ローマ帝国衰亡史」として単純化されない西洋古代史の理解に接近出来るのではなかろうか。

●おわりに

人間どうしの生き生きとした交流が、そこにあったはずである。もし、それに気付かず国境線をはじめとする何らかの「境界線」を挟んだ国家や民族、あるいは制度…といった枠組みで、それらの間の政治的対立や衝突を軸として必修世界史を学び、これをもって人類の歴史を理解したと認識する場合があるならば、何と不幸なことだろうか。

学習者による史料の読解は、教科書や授業者による知識の一方的な伝達を避け、それぞれの歴史的事項の背景や詳細に自ら迫らんとする建前でない知的好奇心や探究心、あるいは既習の内容に対する批判的思考を育み、結果としてより深い理解を得ることに繋がるだろう。

言うまでもなく世界史の学習は、今日の国際的な平和協調を考え、実現する上で必要不可欠なものであり、だからこそ、これまで人々が如何に交流し、共存し、ときに衝突を繰り返してきたのかを学習者に考察させなければならぬ。予め与えられている教科書・資料集には描かれていない部分をどう考えさせるのかということにおいて、授業者はその力量を問われているのではなかろうか。



日本メキシコ交流 400 年 ～交流のエピソード～

●交流のはじまり

2009 年と 2010 年は日本メキシコ交流 400 周年と位置づけられ、昨年から両国でさまざまな記念事業が開催されている。そもそも両国の交流は、人名救助からはじまった。

1609 年、前フィリピン臨時総督ロドリゴ・デ・ビベロの乗ったガレオン船サン・フランシスコ号が、フィリピンからヌエバ・エスパーニャ（現在のメキシコを中心としたスペインの副王領）へ戻る途中、房総半島沖で座礁し、乗組員が現在の千葉県御宿町の浜に漂着した。373 名のうち、317 名が地元住民により救助された。ビベロは江戸で 2 代将軍徳川秀忠に、駿府で徳川家康に謁見し、メキシコ貿易開設を望む家康との間に通商に関する仮協定を結んだ。翌 1610 年、ビベロは、家康・秀忠からのスペイン国王とヌエバ・エスパーニャ副王宛の書簡と贈り物を携えて、ウィリアム・アダムズ（三浦按針）の指導で幕府が建造したサン・ブエナベンツウラ号でヌエバ・エスパーニャに帰還した。このとき、京都の商人田中勝介らがビベロとともに渡航した。

しかしその後、1624 年にスペイン船の来航が禁じられ、ヌエバ・エスパーニャに対する日本の扉は閉ざされてしまった。以後、交流が再開されるまで 250 年の歳月が過ぎることになった。

●新たな交流のはじまり

江戸幕府は 1858 年、日米修好通商条約を結び、ついでオランダ・ロシア・イギリス・フランスともほぼ同じ内容の通商条約を結び、開国した。これらの条約は、領事裁判権の承認、関税自主権の放棄などを決めた不平等条約であった。その後、明治政府は岩倉使節団の派遣以来、条約改正を外交政策の基軸にすえ、欧米諸国と交渉を続けることとなった。

一方、ヌエバ・エスパーニャは 1821 年にスペインから独立し、メキシコとなった。1874 年、金星の太陽面通過を観測するために、諸外国から観測隊が来日したが、当時国交のなかったメキシコからもディアス＝コバルビアス率いる観測隊が来日し、横浜の野毛山に観測所を設置した。明治政府の厚遇を受け、観測を終えたコバルビアスは日本各地を旅行し、帰国後に『メキシコ天体観測隊日本旅行記』という報告書をまとめて、日本との国交樹立の必要性を説いた。これが布石となり、メキシコ政府が条約締結の提案を行い、1888 年、日墨（日本メキシコ）修好通商航海条約がワシントンで締結された。これは日本にとって欧米諸国との間で初めて結んだ平等条約で、相互対等の最恵国待遇、両国の通商・航海の自由などが取り決められた。日墨修好通商航海条約は、日本が欧米列強諸国と新たに平等条約を締結する契機となった。

◆メキシコ略史（19 世紀以降）

1810	イダルゴによる独立運動
1821	スペインより独立
1846	アメリカ＝メキシコ（米墨）戦争（～48）
1858	フアレス、大統領就任（～72）
1861	ナポレオン 3 世、メキシコ出兵（～67）
1864	マクシミリアン、皇帝即位（～67 銃殺）
1877	ディアス、大統領就任。独裁はじまる
1888	日墨（日本メキシコ）修好通商航海条約締結
1910	メキシコ革命勃発、翌年、ディアス失脚
1917	現行憲法公布
1994	北米自由貿易協定（NAFTA）発効
2005	日本・メキシコ経済連携協定（EPA）発効

解説①に関連するホームページの URL

外務省－各国・地域情勢 ◆<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/index.html>

各国の基礎データや最近の情勢、日本との関係などについての情報を掲載。

在日メキシコ合衆国大使館 ◆<http://portal.sre.gob.mx/japon/j/>

メキシコの一般情報のほか、メキシコと日本の関係史なども紹介している。

●日韓歴史共同研究の取り組み

2010年3月、日本と韓国の有識者で構成される「日韓歴史共同研究委員会」は、第2期の研究成果報告を公表した。この委員会は、日韓関係史の調査・研究をおこなうため、2001年10月の日韓首脳会談における合意にもとづき設立された。2002年5月に第1期の委員会が発足、古代史・中近世史・近現代史の3つの分科会で共同研究をすすめ、2005年6月に報告書が公開された。2007年6月に第2期の委員会が発足、第1期の3つの分科会に、「教科書小グループ」が新設され、歴史教科書の記述内容などの検証がなされた。

報告書（第2期）は、日韓の研究者の論文を掲載し、とくに第3分科会（近現代史）と教科書小グループのものは、論文に対する他国の研究者の批評文、批評に対する論文作成者のコメントを載せている。教科書小グループでは、「従軍慰安婦」や侵略戦争をめぐる記述で議論が展開された。韓国側の研究者は、日本の中学校の教科書について「慰安婦についての記述は1996年以降、明らかに縮小の一途をたどっている」とし、高等学校の教科書も「中学校の教科書ととくに違いはない」とする。その根本的要因を「政治、社会的状況の保守化」とし、それは「ジェンダー偏向」と指摘する。これに対して、日本側は、「けっして女性軽視など

ではなく、実証研究の進展にともなう不正確な記述の「淘汰」とみるのが妥当である」とする。報告書は、このように、互いの歴史認識を理解する難しさが浮き彫りとなった印象を与え、一部には、今後の共同研究の継続を疑問視する声があがるなど課題も多い。なお、今年2010年は、1910年に日本が強要した韓国併合条約が結ばれてから100年目にあたる。 ※報告書の詳細は、財団法人日韓文化交流基金のホームページで公開されている。

(<http://www.jkcf.or.jp/history/>)

●日中歴史共同研究の取り組み

日本と中国の有識者で構成される日中歴史共同研究もすすめられている。2006年に第1回の会合が開催され、2010年1月にはじめての報告書が公開された。1937年の南京事件について、両国の見解は「大規模な虐殺行為である」との認識で一致したが、その犠牲者数などについては今後の検討課題となった。また、報告書では、中国側の意向で、1989年の天安門事件などを含めた戦後部分は除かれている。 ※報告書の詳細は、外務省のホームページで公開されている。

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/rekishi_kk.html)

●赤坂離宮の国宝指定

2009年11月、赤坂離宮（現、迎賓館。東京・港区元赤坂）が明治以降の文化財として初めて国宝に指定された。赤坂離宮は、もとは紀伊徳川家の中屋敷があった場所に、1909（明治42）年に宮内省内匠寮の技師であった片山東熊の設計によって、皇太子明宮嘉仁くはるのみやよしひと親王（のちの大正天皇）のための東宮御所としてつくられたものである。大規模で複合的な宮殿建築で、外観の意匠はネオ・バロック様式を採用し、内外の装飾には日本独特の主題が用いられている。西洋の建築意匠や技術の習得にはじまった明治期の建築界において、日本人建築家の設計による洋風建築の到達点として、歴史的・文化的に高く評価されている。

●高島屋東京店の重要文化財指定

2009年6月、「高島屋東京店」（東京・中央区日本橋）が重要文化財に指定された。百貨店建築としては初めてのこととなる。高島屋東京店は、1933（昭和8）年3月に完成。現在、鉄骨鉄筋コンクリート造、地上8階、地下3階建である。設計は、建築図案競技によって選ばれた高橋貞太郎の案が採用された。百貨店で初めて全館で冷暖房装置を完備し、エレベーター・エスカレーターも揃え、内装にはイタリア製大理石が用いられた。戦後、村野藤吾の設計により大きく2期の増築がおこなわれ、現在の姿になった。増築部分は全体の約3分の2を占める。高島屋東京店は、設立当初の部分と、当初の意匠を継承しつつ近代建築の手法を駆使した増築部の意匠の優れた対比という、建築作品としての完成度の高さが評価されている。

●百貨店の歴史

日本における近代的百貨店は、1904（明治 37）年の三越呉服店（三越）の発足を起源とする。三越は、「当店販売の商品は今後一層其種類を増加し凡そ衣服装飾に関する品目は一棟の下にて御用弁相成候様設備致し結局米国に行はるるデパートメント・ストアの一部を実現可致候事」と、日本初の欧米流デパートをめざすという「デパートメントストア宣言」をおこなった。三越は、1673（延宝元）年に創業した呉服店「越後屋」をその源流とする。三越の誕生以後、明治時代後半から大正時代にかけて、多くの呉服店が百貨店化への道を歩んだ。

百貨店は、次第に高級なイメージをつくりあげていく。取り扱う商品の増大にともない、より大きな売場床面積をもつ建物が必要となった。大正時代になると、本格的なネサンス様式の洋風建築が多く出現した。

大正時代になると電鉄系の会社によって駅と一体化したターミナルデパートもつくられるようになった。百貨店は、当初は、知識層であった上流・中流階級の社交場

的な存在であったが、食堂や屋上庭園、催し物などが充実され庶民へ浸透し、次第に家族の行楽の場としての役割を担うようになっていった。

参照 『改訂版 日本史A』(p. 74), 『最新日本史図表 三訂版』(p. 235)



▲高島屋東京店（川澄建築写真事務所・高島屋提供）

解説

4

まきむく

纏向遺跡（奈良県桜井市）の発掘

●大型建物跡の発見

奈良県桜井市の纏向遺跡で、3世紀前半の大型建物跡がみつかった（2009年11月10日、桜井市教育委員会発表）。同時期の建物としては最大規模のものである。纏向遺跡は、南北1.5キロメートル、東西2キロメートルの範囲に、箸墓<はしはか>古墳など最古級の前方後円墳6基が点在する遺跡。邪馬台国の有力な候補地ともされ、2009年2月から中枢部の本格的な発掘調査がすすめられている。同年3月には、同じ方向を向き、同一線上に並んだ3世紀前半の3つの建物跡も確認されている（[地歴最新資料第11号参照](#)）。今回発掘された建物跡は、南北19.2メートル、東西12.4メートル、床面積約238平方メートルの高床式建物と推定される。卑弥呼のいた時代とも重なり、邪馬台国の中枢施設の可能性を指摘する声もある。

●箸墓古墳の築造年代

2009年5月、国立歴史民俗博物館（「歴博」、千葉・佐倉市）の研究チームは、卑弥呼の墓との説もある箸墓古墳の築造時期は240～260年であるとの研究成果を発表した。「歴博」の研究グループは、箸墓古墳の周濠から出土した土器10点の表面に付着した炭化物を、炭素14年代測定法により分析した。導きだされた数値は、247年頃とされる卑弥呼の死亡時期と重なることから、箸墓古墳が卑弥呼の墓である可能性が高くなったとの見解を示した。しかし、数値だけがひとり歩きすることを懸念する声も多い。また、文献学上の問題点も指摘されており、今回の発表に対しては、慎重な対応が求められている。

参照 『最新日本史図表 三訂版』(p. 1, 32)

解説②～④に関連するホームページのURL

文化庁（文化遺産オンライン）◆<http://bunka.nii.ac.jp/Index.do>

国指定の文化財について、さまざまな情報を提供している。「文化遺産データベース」では、さまざまな条件で検索できる。「赤坂離宮」についても説明がある。

アジア歴史資料センター（「アジ歴」）は、2001年に国立公文書館の一組織として設立された。公文書の原本画像をデータベース化し、インターネットを通じて国内外に無料で提供している。国立公文書館・外務省外交史料館・防衛省防衛研究所図書館で所蔵する明治から第二次世界大戦終結までの公文書を対象とし、公開資料数は現時点で約2000万画像、2014年までには約3000万画像の資料の公開を予定している。

●資料の検索



▲「アジ歴」ウェブサイト（トップ画面）

「アジ歴」で公開する資料（公文書）には、資料ごとに固有の番号（「レファレンスコード」）がつけられており、同センターのウェブサイトにある「レファレンスコード検索」で、原文の画像を閲覧することができる。おもな「レファレンスコード」は右表の通り。なお、「レファレンスコード」が不明でも、ウェブサイトのトップ画面から「簡易検索（キーワード検索）」で検索できる。

<検索の手順>

- ①「資料の閲覧」（トップ画面左上）をクリック
- ②「レファレンスコード検索」をクリック
- ③閲覧したい資料の「レファレンスコード」を入力

◆「アジ歴」におけるおもな資料コード一覧

史料名	レファレンスコード
王政復古の大神令	A04017123000(9)
五箇条の誓文	A04017131000(5)
廃藩置県	A04017124600(57)
徴兵告諭	C09060002500(4)
地租改正	A07060190700
樺太・千島交換条約	A01100102800(4)
讒謗律	C04017582900
新聞紙条例	C04017583000
集会条例	A07090173800(5)
保安条例	A03020016500(2)
大日本帝国憲法（明治憲法）	A03020029600(4)
明治民法	A03020327500
日清講和条約（下関条約）	A03020213100
治安警察法	A03020436000(2)
日露講和条約（ポーツマス条約）	A03020652300
韓国併合条約	A03020879400
工場法	A03020885300(2)
二十一カ条の要求	B06150014200(4)
ワシントン会議（海軍軍縮条約）	A03021484300(5)
治安維持法（1925年4月22日）	A03021545100
改正治安維持法（1928年6月29日）	A03021692600
国際連盟脱退通告文	B04014056900(15)
近衛声明（第一次）	A03023981800
国家総動員法	A03022164500(3)
ハル・ノート（極秘電報）	B02030723300(6)
カイロ宣言	B02033037200
ポツダム宣言	B02033037100
終戦の詔書	A04017702300
（天皇の）人間宣言	A04017784700
	※（ ）は頁数。

解説⑤に関連するホームページのURL

アジア歴史資料センター ◆ <http://www.jacar.go.jp/>

アジア歴史資料センターでは、資料調査の成果を、ホームページで企画展のかたちで展開している。現在は、「日露戦争特別展Ⅱ 開戦から日本海海戦まで激闘500日の記録」を公開。

学習指導要領の改訂の度に強調されるのは、「生きる力」です。ところが、この「生きる力」とは、抽象的な説明はつくものの、具体的に何なのか、ということがとらえにくいのです。「生きる力」を私なりに解釈すれば、つまり、これは教科や科目を超えて考える力ということだと思います。直近の学習指導要領改訂でも、各教科で国語的な考察力が求められていることから、文部科学省の意図していることが明らかです。

今回ご紹介する地理の授業での読み聞かせの実践は、こうした教科や科目を超えた思考力を養うという方針に、実にマッチした内容であると考えます。

●パワーポイントの限界

パワーポイントを多用して授業を展開することができます。もちろん、地理の授業でも大いに活用できます。例を挙げるならば、地図の中に山地や河川、都市名などを表示させていく白地図作成支援のもの、各地の有名な建造物や地形を写真で見せるもの、そして工業生産の推移などを示したグラフの提示などです。

今から7年ほど前になりますが、1年間の地理の授業のすべてをパワーポイントだけで実施したことがあります。資料集的な提示はもちろんのこと、板書の文字もパワーポイントで表示させました。最初、生徒たちからは「うおーっ！」と感嘆の声が漏れました。「これはいける！」。私は内心、ついに究極の教授法に達した！と思いました。

ところが、生徒たちのテストの出来は思ったほど伸びていません。テストの結果だけではなく、思考力がついたかどうかのチェックもしてみました。しかし、これもダメでした。結局、テレビ世代の子どもたちは画面に映し出されるということに慣らされすぎているということです。待っていれば写真が出てきて、「あっ、そうですか。」と受け入れていく、いわゆる受動的な姿勢になってしまっているのです。正直なところ、このパワーポイントの試みは1年間で終わり後が続きませんでした。完全に失敗でした。

●学習は「あっ、そうか！」の中に隠されている！

「気づき」は「学び」の第一歩です。では、どうすれば「気づき」を与えられるのでしょうか？

私は、パワーポイントの魔力に取り憑かれて、これこそが「気づき」の与えられる究極の方法だ、と陶醉しきっていたのです。ところが、生徒たちは実に正直に私に言ってきたのです。「もう、スライド画面で授業するのをやめてください！」と。「気づき」どころが、生徒の学習に対する好奇心を完全に奪ってしまったのです。これは大いに

反省しなくてはなりません。

「気づき」とは、自分が考えてきたものと、実際に食い違っていた時に起こるのです。パワーポイントで写真を見せれば、結果だけを知らせているだけで、食い違いを考えさせる題材を何も与えていないわけです。

●地歴+国語＝「読み聞かせ」

そこで、次に私が考えた方法が「読み聞かせ」だったのです。例えば、アメリカを学習するときに自由の女神にまつわる話をすれば、生徒たちは自由の女神とはどんなものかと想像をかき立てられて、自分たちの頭の中で勝手に自由の女神像をイメージするはずでした。そこで、教師は生徒たちに、それぞれがどんな女神像かを分析させてから、実物の写真を提示します。たいてい生徒たちは自分の描いていた自由の女神像とは異なっていますから、ここで「あれっ？」という気づきが起こります。

ただし自由の女神像はあまりにも有名すぎて誰でも実物を知っているので、実際の授業では使えません。そこで、もう少し難度を上げて、かつ国語的な読解能力を組み合わせたものが、「読み聞かせ」です。

●題材は昔話

日本の各地には昔話、いわゆる「民話」が必ずあります。これらは、地方色が豊かで、長い時間をかけて地域性が凝縮されています。内容的には神社やお寺に関する話が多くあります。これは、訓話の要素が入っているために、宗教観と密接に関係しているためだと考えられます。そのため、地域性という「地理」の分野と、宗教観の「倫理」、「現代社会」の分野、そして国語の読解力が組み合わせられており、教科や科目を超えた「生きる力」を学ぶのに最適と考えました。

●ももたろうを使った授業実践例

私の実践した高校3年生の地理の授業の中での、近畿地方に伝わる「ももたろう」読み聞かせの流れをご紹介します。今さら「ももたろう」はないだろうと思われるかもしれませんが、これは意外と奥が深いのです。

(1)導入

日本地理の中で扱いました。高校3年で日本地理を各地方別に全てを学ぶことはしませんが、日本の農業や工業、貿易などを系統的に学ぶため、この時に近畿地方の一例として取り上げました。

(2)授業展開

まず、地図帳を閉じさせて話を聞く準備をさせます。私はたびたび授業中に本を読むため、生徒たちも今回はどん

な話かなと期待している様子がうかがえます。そこで、前置きを一つだけします。「ある有名な昔話をします、地名がたくさん出てくるので、どこのことだか考えてみてください」と。そこで、「ももたろう」を読み始めます(教材は「クレヨン王国むかし話」講談社、福永令三著)。話の展開は次のような感じです。

川で洗濯をしていたおばあさんには、子どもがいなかったことから清水寺にお参りをしたことがあるという。おじいさんと二人でももたろうを育て、やがて鬼退治に行く、と展開はかなり早い。都大路でイヌ、一条の大橋でサル、嵯峨野でキジがそれぞれ合流して保津川で船を借りる。そして瀬戸内海に出て鬼が島へゆく。最後に鬼退治をして保津川まで戻ってくると、イヌ、サル、キジにそれぞれ残っていたきびだんごを与えて別れた、とここで話を終わります。さすがに高校3年生だと、その情景はすぐに目に浮かび、地図上でも察しがついているようでした。そこで、さっそく地図帳でルートを確認するように言いました。

(3) 作業

ここで白地図を配ります。実際にももたろうが歩いたルートを記入させていくと、とんでもない勘違いをしている生徒がちらほら出てきます。保津川はそのまま下って行くと淀川となって大阪湾から瀬戸内海につながっているはずですが、何人かは保津川から生駒山地や和泉山脈を経て和歌山に出たり、箕面に回って大阪に入ったりと、首をかしげるものも確かにありますが、これはごく少数であって、大半の生徒は淀川にルートを取っています。

(4) 考察

前段の作業で地理の基本である、地域を「面」の広がりとしてとらえるという学習ができます。つまり地名を「点」とするならば、それを覚えたところで地理の学習をしたことにはならないからです。ルートを「線」と考えると、「点」と「点」を「線」で結ぶことができたわけです。

しかし、これではまだ「面」にはなっていません。そこで、考察を加えます。それは「鬼が島」がいったいどこにあるのか?と考えさせることです。教材とした本の中に、その答えはありません。ヒントを見つけて自分たちで考えるしか方法はないのです。実は、答えが示されていないことを、ヒントから推測することこそが、「生きる力」のエッセンスだと考えます。実際、生徒たちはこのことに慣れていません。

教材としたこの本の中の「ももたろう」では、実におもしろいヒントが隠されています。それは、保津川で船を借りたお代を鬼が島から帰ってきた時に払いますが、現金ではなく「鬼の宝のサンゴ」で支払うのです。このヒントに

気づかないうちは、生徒たちは必ず言います。鬼が島はつまり淡路島である。ところが、このサンゴに気がつく、たいていの生徒は混乱します。これが前述の「気づき」なのです。自分の当たり前に考えていたことが根底から覆されてしまうような体験を、こちらが意図的に仕組むことも教師の役目の一つでしょう。

さて、ここで生徒たちに自由意見を言わせると、いろいろな話が飛び出してきて面白いのです。鬼が島は沖縄だ、ももたろう一行が瀬戸内海に出た、とは言っているが鬼が島が瀬戸内海にあるとは言っていない、だから沖縄でもおかしくないという意見です。また、こんな意見もあります。鬼の宝なのだから、鬼が島自体がサンゴの採れるところでもなくともいいのだ。鬼が南方の島で採取したものだから、と説得力があります。ほかに、この話のころは地球が温暖化しており、当時は瀬戸内海でもサンゴがあるとか、紀伊半島でもサンゴがあるから、ここも広い意味で瀬戸内海としてとらえているのではないか、などなど、想像力豊かな数々の話は聞いているだけで実に楽しいのです。もちろん、答えはないのですが、生徒の話に論理的な飛躍があるようであれば、突っ込みを入れていきます。奇想天外な話であっても、論理的な整合性があれば評価します。

●教師に必要な力とは?

これだけの想像力豊かな話がなぜ飛び出してくるのか。それはこの授業の題材が「読み聞かせ」だからです。民話というお話だからこそ、自由な作り話が許される環境を提供しているのです。これが数式の展開であれば、生徒たちはまったく違った反応をするでしょう。

「読み聞かせ」は本を読んで聞かせるだけでは、授業としては未完成です。その後、生徒に話をさせて、教師が受け止める、ここまでできてこそ「読み聞かせ」が学習としての意味を持つことになると考えます。大切なのは教師がこれらの話に耳を傾けて、受け止めることなのです。

●「生きる力」は先端学際によって見いだされる

ある一つの分野の専門性を極めることは大切なことです。しかし、一方で複数の分野から横断的に「知」を取り込み、「考察」を加えていくことは、「生きる力」の具体的な姿ということができるでしょう。教科の専門性を深めるという先端の部分と、教科の境目にある際(きわ)の部分とうまくつなげていくことができる教師こそが、これからの教育に必要なのではないのでしょうか、今回ご紹介した「読み聞かせ」は、先端学際の一つの試みであることを、付け加えておきたいと思います。

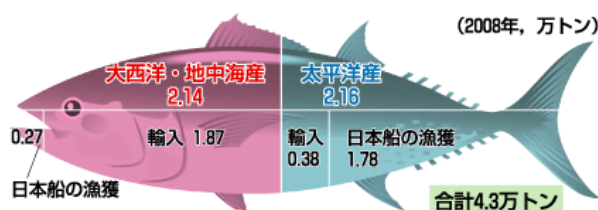
●先端学際的活動を有志教員と共同で開設しているホームページ <http://chienomi.net/>



●第15回ワシントン条約締約国会議

2010年3月、カタールのドーハで開かれた野生動植物の国際取引を規制するワシントン条約の締約国会議で、大西洋・地中海産のクロマグロを絶滅危惧種として禁輸するモナコ案と欧州連合(EU)の修正案が否決された。モナコ案はクロマグロの国際取引を禁じる内容で、EUの修正案は2011年5月までの猶予期間を設けて発効の是非を最終決定するというものであった。

クロマグロは「本マグロ」とも呼ばれ、大トロや中トロとなる部分が多く味も良いため、マグロ類の中でも最高級品とされる。太平洋産と大西洋・地中海産で種類が異なり、大西洋・地中海産クロマグロの漁獲のうち約80%が日本に輸出されている。日本で流通するクロマグロのうち約半数を占める大西洋・地中海産のクロマグロが取引禁止となれば、その影響は計り知れない状況であった。



▲日本で流通するクロマグロ(水産庁資料)

●漁業資源をめぐる問題

そもそも、なぜクロマグロが規制対象となったのであろうか。大西洋・地中海産のクロマグロは、1970年代に比べ1/3に減少したといわれる。その背景には、捕獲した魚をいけすに入れさらに大きく育てる「蓄養」の拡大がある。もともとは産卵後の痩せたマグロを捕獲し、栄養価の高い餌を与え太らせてから輸出するスタイルであったが、天然物に比べ安価なため需要が大きく、効率よく増産するために巻き網漁による産卵前の幼魚の捕獲までおこなわれるようになった。そのため、蓄養の拡大とともに大西洋・地中海のクロマグロの資源量は減少して

いったという。

大西洋・地中海の資源管理に取り組む「大西洋マグロ類保存国際委員会」(ICCAT)は、2008～09年の2年間でクロマグロの漁獲枠を2万8500トンから、半分以上の1万3500トンへと削減した。しかし、持続可能な漁業のためには漁獲枠をもっと減らすべきであるという意見や、また規制にもかかわらず各国に割り当てられた漁獲量以上の漁獲がおこなわれ、その大半が日本に輸入されていたという事実もある。

危機的な状況にあるとされるのはクロマグロだけではない。FAO(国連食糧農業機関)の統計によると、世界の漁業資源の7%は枯渇状態、17%は過剰漁獲状態、52%は持続的な生産量の限界状態にあるという。漁業資源の減少の理由として、最新の魚群探知機を搭載した大型漁船による過剰漁業やIllegal(違法)、Unreported(無報告)、Unregulated(無規制)の頭文字をとったIUU漁業と呼ばれる無秩序な漁業、トロール漁に代表される混獲などが指摘されている。

●解決へ向けて

FAOは「保存及び管理のための国際的な措置の公海上の漁船による遵守を促進するための協定」などを策定し、公海におけるIUU漁船の操業防止を定めている。日本は、漁業資源の持続可能な利用に向けて、規制を順守する正規船のリスト(ポジティブリスト)を作成し、リストにないIUU漁船からの輸入を認めない措置を取っている。また、クロマグロでは困難とされる卵からの完全養殖の技術開発を進めている。

2010年は国連が定める生物多様性年にあたり、10月には名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議が開催される。持続可能な社会の実現に向け、生物の多様性を保持しながら人間生活を営む知恵を身に付ける必要がある。

解説⑥に関連するホームページのURL

水産庁/まぐろに関する情報 ◆<http://www.jfa.maff.go.jp/j/tuna/index.html>

主要なまぐろの種類や漁獲量の推移、資源状況、国別の漁獲量などについての情報を掲載。